

## ティーチング・ステートメント

所属 総合教養センター  
名前 神崎 史彦  
作成日 2026/03/12

### 【責任】

入学前教育および大学基盤科目群(初年次教育[考える力/基礎ゼミA/基礎ゼミB/アカデミック・ライティング])のコーディネーターとして、グランドデザインの設計、カリキュラム作成、授業設計・運用、担当教員の取りまとめを担う。併せて実効型実践科目群(情報リテラシー1/2、ライフキャリア概論)を担当し、DPと学修成果の接続、学修データの収集・評価設計・分析を通じて、高校から大学への学びの移行を支える。

### 【理念】

大学教育は言語化された成果を評価しやすい一方、違和感・関心・身体感覚・関係性の中で立ち上がる問いといった「まだ言葉になりきれない知性」を掬い取ることは難しい。私はその点を初年次教育の最大の課題と捉え、可視化と言語化を通して学生が学びとして引き受けられる状態をつくることを理念の中心とする。

教育とは学生が安心して自分の知性を発揮できる場を構築する営みであると考えている。そのうえで、私の教育理念は、学生一人ひとりの多様な知能(インテリジェンス)を見出し、言語化し、社会の中で活かせる力へ育てることである。ここでいうインテリジェンスは、ガードナーの多重知能論という複数の能力(知の様式)を指す。

私はその出発点を見落とさず、学生が自分の知性を自覚し学びとして引き受けられるよう支えたい。その上で、学びを個人の達成に閉じず、他者との関わりの中で拡張することを重視している。こうした集合知は、互いの得意・不得意を補い合いながら課題に向き合う力となり、学内外の協働へと接続していく。

### 【方針・方法】

#### 概要

理念を実現するため、入学前教育・大学基盤科目・実効型実践科目群を、①学修環境の設計、②探究・研究の思考方法、③言語化と表現支援、④DP接続と評価・改善の仕組み化、の4方針で構成している。これらは「知性の発見」「言語化」「社会接続」という学修プロセスを成立させるために相互に関係している。

#### 方針1 安心して知性を発揮できる学修環境をつくる

学修目的と到達目標を明示し、時間厳守やルール共有など基本環境を整える。入学前課題では学びの前提となる学修環境づくりを含めて提示し、修得を促す。進度差や探究経験の差を前提に課題量と支援を調整し、必要に応じて補習・再学習の導線を設ける。学生との対話を通して学習上の機微を拾い、安心して試行錯誤できる場を維持し、成功体験が積み上がる学習過程を設計する。

考える力では、学生が安心してグループでの探究活動に取り組めるよう、「問い」「仮説」「検証」「考察」をワーク(図解化・検討・振り返り)として反復し、手続きの型を身につけさせる。

#### 方針2 問いの生成から探究・研究の思考方法へ接続する

学生の経験や関心を起点に「問い」「仮説」「検証」「考察の整理」という探究・研究の型を授業内

で反復し、基本動作として定着させる。資料読解、根拠の扱い、反駁の位置づけ、表現方法など、アカデミックな作法を実践に即して習得させる。高校段階のPBLと大学での学びの断絶を避け、学習習慣として定着させる。

なお、探究・研究の型を社会へ接続する際、私にとって社会接続とは学生の問いを「感想」から引き剥がし、データ・制度・歴史・当事者の語りといった外部世界に接続して、他者が検証できる形に置き直すことである。問いに関連する情報(統計／報道／政策文書／企業・地域事例)を参照し、因果関係図で構造化したうえで、短い提言または解釈としてレポート／口頭発表で提示させる。

そのために、基礎ゼミA/Bでは(Aで基礎、Bで問いの精緻化を中心に)学習プロセスを設計している。先行研究(入門的文献)の読み方、概念の定義、問いの射程の設定、仮説と根拠の関係の点検を反復し、問いを学術的に検討できる水準へ高める。

### 方針3 言語優位の世界に埋もれさせず、言語化と表現を支える

内なる言葉(内言)を前提に、「言葉にならない言葉」を拾い上げる。文章表現に加え、映像教材、付箋ワークによるグルーピング、因果関係を整理する図の作成、LEGO等を活用し、概念理解と関係把握を多面的に支援する。グループワークを通じて他者の多様な能力(MI)に触れ、相互に認め合いながら表現を磨く機会を設計する。毎回のリフレクションや中間・期末レポートで学びを言語化し、自己理解へ接続させる。

アカデミック・ライティングでは、「主張」「根拠」「反駁」「含意(展望)」の枠組みと引用・参照の作法を軸に、段落構成と推敲を通して検証可能な文章へ導く。

### 方針4 DP接続を軸に、評価と改善の仕組みを構築する

シラバス・ルーブリックをDPに整合させ、評価基準を明確化する。入学前教育では学修支援システムを用いて課題設計・評価・フィードバックを行い、大学基盤科目へ接続する学修データを収集する。学修環境アンケート等のデータも含め、授業運用の指針となる情報を提供し、教員の教育活動を支援する。基盤科目でも同様の仕組みを運用し、DP実現としての学修成果の可視化と、科目内容の開発・授業改善を継続する。

#### 【成果・評価】

- 2025年度秋学期、担当科目群におけるDP達成評価が学内平均を上回った(対象:情報リテラシー1(再履修)／情報リテラシー2／考える力(再履修))。
- 学生の単位修得率(再履修除く):98%。
- 入学前教育における評価・フィードバックのシステムを構築し、基盤科目の授業支援およびクラス編成等に活用可能な基盤を整備した。
- 基盤科目のグランドデザイン・シラバスに探究の型(問い／仮説／検証／考察)を組み込み、学修プロセスの可視化を進めた。

#### 【目標】

- 短期(～2026年度末) 入学前教育から初年次教育までのDP接続評価(ルーブリック)の策定・運用を安定化し、学修効果の可視化ができる状態をつくる。
- 中期(2027～2028年度末) 本学DPに即した共通ルーブリックを策定し、DPで教育活動を束ねる設計と運用の体制を整え、内部質保証の仕組みを構築する。
- 長期(2027年度以降) 学生の多重知能(MI)としての能力が「見出され、言語化され、社会接続へ向かう」学修プロセスを、基盤科目群の設計と教育改善に還元できる体制を確立する。